

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節 夕の祈禱会

在主の霊止

——コリント前書第4章6～21節——

1974年6月2日

小池辰雄

本来無者 キリスト者の自由 ヤケクソ信仰 塵芥伝道 御霊を呼吸するのが祈り 神の国は言にあらざる能力にあり 啓示の事実 私はベグルユンダー（創始者） バルトの『教会教義学』
在主の霊止 祈り

【コリント前書4章】

6 兄弟よ、われ汝等のために此等のことを我とアポロとの上に当てて言えり。これ汝らが『録しるされたる所を踰こゆまじき』を我らの事によりて学び、この人をあげ、かの人を貶おとして誇らざらん為なり。7 汝をして人と異ならしむる者は誰ぞ、なんじの有もてる物に何か受けぬ物あるか。もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。8 なんじら既に飽き、既に富めり、我らを差さしお措おきて王となれり。われ実に汝らが王たらんことを願う、われらも共に王たることを得んが為なり。9 我おもう、神は使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後の者として見せ給えり。実に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、観物にせられたるなり。10 我らはキリストのために愚なる者となり、汝らはキリストに在りて慧ちかき者となれり。我等は弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑いやし。11 今の時にいたるまで我らは飢え、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、12 手づから働きて勞し、罵ののしむるときは祝し、責めらるるときは忍び、13 譏そらるるときは勸すすめなせり。我らは今に至るまで世の塵芥あきたのごとく、万の物の垢あかのごとくせられたり。

14 わが斯く書しるすは汝らを辱しめんとにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。15 汝等にはキリストに於ける守役もりやく一万ありとも、父は多くあることなし。そはキリスト・イエスに在りて福音により汝らを生みたるは、我なればなり。16 この故に汝らに勸む、我に效なう者とならんことを。17 之がために主にありて忠実なる我が愛子あいしテモテを汝らに遣つかせり。彼は我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教会に教うる所を、汝らに思い出さしむべし。18 わが汝らに到ること無しとして誇る者あり。19 されど主の御意ならば速すみかに汝等にいたり、誇る者の言にはあらで、その能力ちからを知らんとす。20 神



の国は言にあらず、能力にあればなり。²¹汝ら何を欲するか、われ答をもて到らんか、愛と柔和の心をもて到らんか。

●本来無者

「在^{ざい}主^{しゅ}の靈止^{ひと}」と題しました。主に在るところのひと。この頃はもう、私は新約聖書を読んでいると、だんだんものを言うのがいやになってしまったんですね。まあ、そういう点からそろそろ集会を辞めようかと思っている。なるほど、聖書というのものが言えない書だということがしみじみ沁みてくる。勿体ぶって註解なんか書けるものではない。もう本当にまいます、このパウロさんの書簡なんかを見ているとね。

どこを選んでもいいんですけども、今日はコリント前書4章の6節から21節。

⁶兄弟よ、われ汝等のために此等のことを我とアポロとの上に当てて言えり。これ汝らが『録^{しる}されたる所を踰^こゆまじき』を我らの事によりて学び、

ということとは、そういった旧約聖書に「録されたる所を踰ゆまじき」なんていうのは、これは一種の固まった根性です。

この人をあげ、かの人を貶^{おと}して誇らざらん為なり。

徒党的な根性はごめんだと。あるいは、いろいろ賜物によって人を比較してもいかんと。

⁷汝をして人と異ならしむる者は誰ぞ、なんじの有^もてる物に何か受けぬ物あるか。

これですよ。私たちが持つているもの、いや、私たち自身が、受けとつたもの、賜^{たまわ}りたる存在なんです。人間はそれ自身が賜^{たまわ}りたる存在である。それ自身が造られたる存在で、

「自分でこれは造りました。これは自分のものです」

というようなものは何もないくせに、今の民主主義なんていうのは、自分勝手な——随分長いことお父さんやお母さんのご厄介になつていながら、まるでもう父母を父母と思わないうような——全くこれはある意味において動物よりもなお始末の悪い存在です。何といつても、ヨーロッパは、まあアメリカはだいたい悪くなっているようだけれども、それでもアメリカでももちろん結構な面はある。日本だって勿論結構なものがありますけれども。どうも正直、公平にみて、日本はとんでもないことになっている。もう人種が日本人でありながら、ちがう人種になつてしまっている。日本人は新しく、今までの日本の精神史をしっかりと読み直すといい。そして、日本には本来こういうものがあつて、これを更に福音の上で伸ばすという自覚を持たなくては。私も日本史をもう少ししっかりとその点では読まなくてはいいかんと思う。まあドイツでも少しはやつてきましたけれども。

「なんじの有^もてる物に何か受けぬ物あるか」

と。自己そのものが受け賜つたもの。これは本来、無なんだね。本来、「無者」なんだ、その点からいいにしても。



「本来無一物」

と、さすがにあのみそすり小僧〔寺の米つき男〕は偉いです。本来無者なんだ。禪宗のあの第六祖〔慧能^{えのう}〕になったあのみそすり小僧は、「本来無一物」と言った。あの有名な言葉です。自分を「有」と思ったら、その相対的な有は、そんなものはダメです——絶対の無者は絶対の有者ではありませんけれども——私が言うところの「無」はただ相対的な有無の無ではない。相対の世界、いわゆる相対的概念ではひとつもよいものは出てこない。やはり、「絶対」というのは、対するものに絶するということですから、対者に絶するということだから、対者はあつても、そんな対者に絶したものが絶対というんです。

なんじの有^もてる物に何か受けぬ物あるか。もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。

「誇る」という言葉が散々出てくる。パウロは誇ることが好きだった。本来は非常に誇りの人間だった。自分の自我なんていうものは、自分でどうかしようとしたって、絶対にどうにもならん。これははつきり言っておきます。パウロも絶対にどうにもならないものだから、キリストがとうとう

「この野郎!」

とやっつけてしまったわけです。

「では、キリストにやっつけられるまでは仕方がない」

なんて思うかな、それでは今晚やっつけてあげますから(笑)。

「何ぞ受けぬごとく誇るか」

と。みんな賜ったものです。お父さんやお母さんから、それから社会からも、自然からも。根源的には神さまから賜った。

「賜りたる存在」

というひとつの命題を——命題としてではなく——本当に冥想してごらんさいよ。そうしたら、もうそれだけでたまらなくなる。私はこういうことを言いながら、私の中にはもう御霊の何とかが駆けめぐり始める。

●キリスト者の自由

8 なんじら既に飽き、既に富めり、我らを差^さ措^{さしお}きて王となれり。

面白いことを書くね。いろいろこのパウロを通して恵みがくるものだから、パウロはそう言っている。

われ実に汝らが王たらんことを願う、

このことは本当の意味における自主の世界ですね。キリストを主とすると、こちらが奴隷になる。いつか京都でのお話でも言いましたけれども、あの「キリスト者の自由」です。キリストが主で、こちらは僕。この僕となると、キリストを主とした僕、主をもつ僕は、



これが本当の自由である。即ち自分に死んでいるから。自分の意志に死んで、主の意志に生きているから、絶対者の意志が動いてくるから、これが自分にはもはや囚われない。絶対的なものがここに動き出すから、これが自由だ。これが本当の自主なんです。「自主的」というのはこれが本当の自主です。だから、マルチン・ルターが、

「クリスチャンは自主なる者にして、いかなるものにも従属しない」

と言ったのは、神・キリストに直結しているからです。だから、自分自身に対して「神・キリストが」主となっていることです、「自主」というのはもう少し言い換えると。自分自身に対して主となっているその主の主体は何かというところ、こつち「神・キリスト」なんだ。自主者というのは、主「神・キリスト」を己の主人としている、そういう「自主」という意味ですからね、本来、信仰的に言うならば。この自主なる者が王者なんです。僕でありますから、キリストの僕であるから、今度は万人に、横に向かつて自分が本当に仕える、奉仕する。だから、

「一切のものに対して自分は奴隷である」

という。僕である。即ち喜んで人のために自分を献身する。ペスタロッチが、

「一切のことは他の人のためにある」

と言った。

「自分の存在は、それは愛で、他人のためにあるということが自分の存在だ」という。

「自分にとつては、自分のためには、自分に対しては、何事もしない。何事も存在としない。自分にとつては、何事も自分のためにしない。自分のためには何もしないで、一切の人のためにしている」

というのはこの奉仕の精神なんです。人に仕える。「人に仕える」ということが実はまた「愛する」ということなんです。人に仕えるのは、屈從的に仕えるのではない。献身する。自分をいくらでも人のために用いる。

そのことができるためには本当に自主でなければできないんです。キリストをいただきたいところの自主でなければ、その力はこない。「仕える」というと、普通の道徳的考えからいうと、何か少し意気地のないように思う。そうではない。一切のものを荷^{にな}つていくような仕え方ですから、荷うことは力がなければ荷えない。「仕える」ということは、その「人を荷う」ということです。人を荷うためには力がなければダメ。その力はどこから来るかというところ、ここ「神・キリスト」なんです。だから、これが何ものにも従属しない。

「何ものにも従属しないものが、一切に従属する」

と、ルッターが言ったのは正にそのことです。ルッターはパウロの書簡をよく把^{つか}んだ。

「もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか」

と。「受けたことを誇りなさい」ということ、逆にいうと。



「私の誇りはキリストから受けているということです。わが誇りは、わがものはみなキリストから受けました」

と。受けていることを誇るひとが、いくらでも人に与える。また、いくらでも上からやってくる。それが「無一物無尽蔵」という世界です。

そのちよつと前に凄^{ほこり}いことが書いてあるよ。コリント前書3章21節、

「²¹さらば誰も人を誇^{ほこり}とすな、万^{よろず}の物は汝らの有^{もの}なればなり。²²或^{ある}はパウロ、

或^{ある}はアポロ、或^{ある}はケパ、

私パウロでも、アポロでも、ケパでも、みんなお前たちのものだよと。

或^{ある}は世界、或^{ある}は生、或^{ある}は死、

この死生の世界、

或^{ある}いは現在のもの、或^{ある}は未来のもの、

或^{ある}いは過去と言ったつていいんだよ。だから天・地・地獄の三界も、それから現在・過去・未来の三時相も。空間的な三界も、時間的な三時相も、みなお前たちのものだ。

皆なんじらの有^{もの}なり。²³汝等はキリストの有^{もの}、キリストは神のものなり。」(コ

リント前3:21～23)

パウロの思想は壮大なものです。思想ではないんだよ、これは。パウロはもう示されているから、これを言わざるを得ない。だから、相対的な空間の世界も、時間の世界も、全部あなた方、我々一人ひとりのものだという。

「万物は汝らのものなり」

とは、ローマ書8章にも出ている。そして、これはキリストが宇宙的ですから、キリストは神のもの。もう、何も境界線がないんだよ、パウロというひとは。本当に現実が、相対界がみな絶対なものをもつて動かされている。

もう何だか、私は全身がどうかなつてしまひそうですよ、もの凄く即宇宙のようになる。だから、私はこれを冥想していると、なるほど私自身が原子力だなと思う。私が爆発したら、地球が爆発してしまうかもしれないよ、非常に極端に言えば。というのは、私の全身のエネルギーを物理的な法則でもって原子力的に動かしたら、おそらくそんなことになるのかもしれませんよ。

それくらいに、あなた方一人ひとりが、それが物理界であつてもそうであるなら、いわんや、霊的な存在として、

「なるほどキリストの霊の次元はこんな質を持っていたんだなあ。パウロはそれを受けていたんだなあ、やり切れない世界だな」

と。まあこんなことは、普通の人が聞いたら、キチガイだと思うでしょうね。



●ヤケクソ信仰

われ実に汝らが王たらんことを願う、われらも共に王たることを得んが為なり。⁹ 我おもう、神は使徒たる我らを死に定められし者のごとく、^{しりえ}後の者と見て見せ給えり。

最も卑しいものとして見せた。そうかと思うと、パウロはこういうことをまた言う。

実に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、^{ひとびと}衆人にも、^{みもの}観物にせられたるなり。

^{おろか}10 我らはキリストのために愚なる者となり、

はい、愚者となった。この世の賢者なんかを何もうらやむ必要はない。キリストを持つたら、もう桁がちがうんですから。ドストエフスキーであろうと、ユーゴーであろうと、ゲーテであろうと、ダンテであろうと、ひとつも恐くないですよ。みんな消化してしまう。本当ですよ。普通の文学研究者は一生懸命にやって、微に入り細に入りいろんなことを論ずるけれども、結局大したことないんだよ。

私のあの論文は論文ではないですよ。私の今も書いているものだって、あんまりぶちまけてものを言っているものだから、信雄「長男」のやつが、

「こんなものを世の中に出したら困る。河出「書房」はやはり売れるようにしなればならないから、だいたい文章を変えなければならぬ」

なんて言う。

「ダメだよ、そんな文章を変えたら」

と、私は喧嘩をしているわけで、なかなか出ないんだ。まあ喧嘩は本当の喧嘩ではありませんけれどもね。

そういうことで、通じないんだよ、正直。通じなくてもいいんです、そのうちに通ずるから、時がくれば。

まあ、聖書一卷——旧約聖書がたとえ破れても——新約聖書一卷があれば、今まで地上で出版された億万巻の書もこの新約聖書一卷にかなわない。それくらい凄いです、これは。原始力なんです。これは全く御霊の世界です、キリストが働いている。全部、マタイ伝の始めから黙示録の終わりまで。

まあキリストという方は、これはもう大変な方です。たった30歳そこそこで地上を去ったんだけど。それは

「宗教的天才」

とか何とか、そんなものとは桁がちがう。それは何人かかったって、かなわないですよ、キリストには。しかし、その、

「キリストと遠慮なく一つとなろう」

というんですから、キリストの方から遠慮なしにそう言うてくださるんだから。それを絶対恩寵という。だから有り難いです。



10 我らはキリストのために愚^{おろか}なる者となり、

もう大いに愚者とならなければダメです、大愚とならなければ。屁理屈でもって、いわゆる論理でもって、神さまがわかったら、そんな神さまは決して神さまではない。非常によくまとまって、

「ああこれなら、神さまらしい」

なんて、そんなものはちつとも神さまではない。

「もう全然わからん。なぜ、神さまはこうデタラメなんだろうか。なぜこんなに不公平なんだろうか？」

と、そういうのが神さまなんだ。だから、普通の人には、神さまが信じられないわけですよ。突然地震がきて、罪のない人がみんな死んでしまつて、

「そんなことをして、神さまはいいのか!？」

なんていうわけで、疑問がくるわけだよ。そういう疑問や何かにもう口をつぐんでしまつて、歯をくいしばつても、その先へ行くというと、大きな神さまが出てくるんだ。しょうがないです、これは。最後の神の国がくると、それがみんなわかる。もう人生は、そういったヤケクソの突き抜けた信仰でなければ、もたないですよ、特にこれからは。

ですから、皆さんは、私はもう勿体なくてしょうがない。さつきから言っている通り、あなた方一人びとりが幕屋を開かなかつたら、本当に勿体ないです。宝の持ち腐れだもの。宝のもちぐされをすると、地獄へ行くよ、天国に行けないよ。そのおつもりで。いくらここでもいいものを受けても、宝のもちぐされをしたら、天国へ入ろうと思つたら、

「ちよつと待てー!」

と、チヨイ待ちをくらうよ(笑)。チヨイ待ちをくらわないようにしてください。

10 我らはキリストのために愚^{おろか}なる者となり、汝らはキリストに在^ざりて慧^{さと}き者となれり。

それは、あなた方の回りには、救いを要する人がたくさんいるではないですか。

「ああ、あの人が、福音がわかつてくれればなあ」

と。そうしたら、何とか機会をつかまえて、やるんですよ。私の書いたものをもつてもいいし、一番いいのはとにかく一対一で話すこと。とにかく、真心をもつて、愛をもつて、救いの悲願の祈りをもつてやつてごらんさい。必ず動くから。人はそういった救いを要する存在なんです。本当の愛に飢えているんです。

●塵芥伝道

我等は弱く汝らは強し、

面白いことを言うね、パウロは。使徒たちは、パウロはものすごく強いかと思つたら、「我等は弱く汝らは強し」



という。

「汝らは福音を受けとつたから強くなつたろう」と。

汝らは尊く我らは卑し。¹¹今の時にいたるまで我らは飢え、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、¹²手づから働きて労し、罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、¹³譏らるるときは勧めをなせり。

もう全然、自分がないんです、パウロは。

「福音のためには何でも受けとる。どんな苦しみも結構でござる」

と。「飢え、渴き、裸となり」云々と。まあ私たちがみたいに一応足りているのは、申し訳ない始末です、正直。

¹³譏らるるときは勧めをなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、万の物の垢のごとくせられたり。

塵芥となり垢となつた。ちりあくたです。いつか私は、「塵芥伝道」〔著作集第6巻『随想集』／第三部「母の生涯」／七、「塵芥伝道二十年」(1960年晩秋、「曠野の愛」第35号)〕なんて書いたことがある。塵芥、棄て石。要するに、ゴミみたいなもの。

「聖名のためにはどうなつてもよろしい」ということです。

「この福音のためには、人が救われるためには、お前たちが本当に強くなるためには、幸いとなるためには」

と、畳みかけて書いてある。本当に彼はキリストの僕ですね。

¹⁴わが斯く書すは汝らを辱しめんとにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。¹⁵汝等にはキリストに於ける守役一万ありとも、父は多くあることなし。

パウロは、コリント教会に対しては、自分はある意味において、父の役割をしていると思つてゐる。

そはキリスト・イエスに在りて福音により汝らを生みたるは、我なればなり。この言葉がそうです。

¹⁶この故に汝らに勧む、我に效う者とならんことを。¹⁷之がために主にありて忠実なる我が愛子テモテを汝らに遣せり。彼は我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教会に教うる所を、汝らに思い出さしむべし。

ここに、

「キリスト・イエスに在りて、キリストにありて」という言葉がある。



●御霊を呼吸するのが祈り

アドルフ・ダイスマン (Gustav Adolf Deissmann 1866～1937 ドイツのルター派新約聖書学者) という人が『パウロ』(Paulus) という本を書いた。これは名著です。特にパウロの「キリスト神秘」ということは、この

「キリストに在って」「エン・クリストー」

という言葉において特に彼はつかまえた。ちよつと、ダイスマンの言葉を読みますと、

「これは真に魂の最も深いところから迸り出ているところの告白である。それは私の深みに浸透して輝いているところの、また一切それを統べ治めているところのある確かさ、はつきりとキリストがその確かさをもって浸透しまた支配しているその確かさの魂の最も奥底から迸っているところの告白である。キリストが自分のうちにいらつしやるということは、彼には本当に浸透している。また、自分がキリストの中にある言葉も同じく。キリストは御霊である、それ故にキリストはパウロの中に、またパウロはキリストの中に生きることができる。」

キリストが霊だから、御霊だから、御霊なるキリストだから、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

と言うときには、そのキリストは

「御霊なるキリスト」

です、勿論。はつきりいって、「御霊」といつたって構わない。御霊とキリストは分けることはできないから。キリストの霊でないものは、御霊とはいえない。

「神の霊」^{みたま}は、旧約聖書においては、キリストを通らないでいきなり預言者に来た。イザ

ヤ書42章にある通りに、

「エホバの霊、我に臨めり」

という。けれども、新約においてはキリストを通さなければ絶対に来ない。だから、十字架を通して昇天したキリストの霊が御霊として臨んでいる。背後には十字架がある。甦り給いしキリストがある。だから、私が言っている通り、この十字架と甦りのキリスト——永遠の生命を持ったキリスト——と御霊とは絶対不可離の関係にある。

このダイスマンも言っている通り——これはちよつとき私が言ったようなことが書いてあるな、私はここところはさつきは気がつかなくなったけれども——

「生命の空気、それは我々の中に吸い込んで、また我々を満たしているところのこの空気のよう、我々がまた同時にこの空気の中に生きまた呼吸しているように、パウロのキリスト内在性というものは正にこの空気と身体との関係と同じである。」

即ち、さつきちよつど私が言ったね。御霊を、霊なるキリストを呼吸しているのが私たちの世界で、これが即ち祈りの世界です。祈りが即ち呼吸だから。御霊なるキリストと相互内在の関係で、



「われキリストの中に、キリストわが中に」

というのがこれです。それはちょうど空気を吸ったり吐いたりしている肉体と同じことだ。魂はキリストを受けとっている。これはキリストが御霊なるキリストで、霊であるから、プニューマであるから。パウロが言っている通り、

「キリストは彼の中に、彼はキリストの中に」

であると非常にはつきりと言っている。これはダイスマンの11頁の言葉ですが。

●神の国は言にあらざる能力にあり

そういうことで、信仰の事態といいますが、この事態に來なかつたならば、

「信仰、信仰」

なんていう言葉が躓きになる、

「信じ仰いでいる」

なんてのは。これは「信受」でいい。いつも言っている通り、信受、信入だよ、信じ入っていく。

私は正直、無教会にいて、内村鑑三・藤井武・塚本虎二の先生方からそのところをはつきりと、今私が告白する如くに聞いたことが恐らくなかつたと言っているでしょう。それだけ、無教会においては、「信仰」という言葉が前面に立っていた。先生方の信仰がまちがつているとは言わない。けれども、このパウロの事態を、御霊の世界を本当に先生方がもつと内住しておられたら、無教会は違つたと思う。それで私は言うんです、

「我々は、そこは前進しなくてはいいかん、踏み止まつていてはいかん」

と。「ここがいい」なんていうところは一つもない。もういいよ使徒たちと、

「私がパウロだか、パウロが私だか」

というような錯覚をきたすくらいに、パウロに酔うぐらいになる。

「私はヨハネに酔います」

と。ああ、ヨハネだつていいよ。ヨハネでも、ペテロでも、パウロでも、酔うくらいに読んでください。

「私はひとつヨハネで行こう。私はパウロで行こう」

と。いいよ、どれでも。その中味は、本当は同じなんだ。ただ人の好き嫌いがあるからね、ヨハネ型、ペテロ型、パウロ型という。浮いたり沈んだりの好きなのはペテロになったりね（笑）。ところが、私みたいなやつは、ヨハネになったり、ペテロになったり、パウロになったり、自由自在だ（笑）。随分勝手なことを言うが、それはどれを見てもうれしいから。私はどれを見ても、ペテロを見ても、ヨハネを見ても、パウロを見ても、楽しくてしょうがない。

「どうも、ペテロは気に入らん」



「ヨハネは何とかだ」

「ヤコブはちよつとこれは」

なんて、なきにしもあらず。ペテロは、神学的にいうとまだひっかかる場所がありますけれども。しかしまた、神学と実存そのものは別ですから。

¹⁸ わが汝らに到ること無しとして誇る者あり。¹⁹ されど主の御意ならば速^{すみや}かに汝等にいたり、誇る者の言にはあらで、その能力^{ちから}を知らんとす。

神・キリストにあるところの本当の実存の力だよな、これは。

²⁰ 神の国は言^{ことば}にあらず、能力^{ちから}にあればなり。

という、非常に力強い言葉が20節に出ている。これは午前の話〔「聖霊の力」(使徒2・1～36)〕と相呼応するから、特に私はここを選んだんですが、

「神の国は言にあらず、能力にあればなり」

と。勿論、霊能、霊的な力です。この力は全存在的な力です。何かしらんが、本当に生命の力。そして、この力は人を何か威圧する力ではない。人を本当に安らかにし、人を本当に喜ばせる力ですよ。まちがえては困る。よく人を威圧するのがあるね。

人を喜ばせ本当に、

「ああ、あれは頼もしい力だな」

ということは、「頼もしい力」ということは、その人を何らかの意味において救い上げるような力ですよ。

「あれはおつかないな、あの力は」

なんてのは困る。そういう腕力的な、暴力学生みたいな、そんな力ではない。

「神の国は言にあらず、能力にある」

というのは、本当に人を生かす力です。

●啓示の事実

私は今朝5時ちよつと過ぎに起きた。とにかく、まあ自在になつてくる。午前は引用するのを忘れてしまったから、少しは引用してあげましょう。これはブルナー [Emil Brunner (1889～1966) スイス出身のプロテスタント (改革派) 神学者であり、カール・バルトと共に弁証法神学運動の草創期を担った新正統主義の代表的神学者] の『ドグマティーク』(教義学) の第3巻、ここでもやっぱ書いているね。

「現在と過去と未来、そついつた三時性をキリストにあるところの実存というものは持っている。完全にしかも非常に逆説に満ちたところの、神秘に満ちた時間の性格をもつて完全につかまえてしまっている。即ち、キリストにおけるところの現在・過去・未来というものは、時間においても現在・過去・未来を一つの有機体的統一をもつてつかまえてしまつ」



たとえば、私に多少解説させれば、「信・愛・望」は――私はブルナーを読みながらすぐそういうことを考えるけれども――信はもともと過去に係わる。キリストが十字架にかかって我々の贖罪を既に完了した。

「ただ一回、十字架にかかって我らに罪の贖いを終え給えり」

とヘブル書に書いてある通り、これは過去におけるところの事実です。

しかし、この事實は、歴史的な単なる相対的歴史的事実ではない。なるほど、相対的な歴史的な事実として、もしとるならば、それは一人の宗教的天才が十字架にかかった。他にも十字架にかかった者がある。盗賊もそうだ、十字架にかかった。十字架にかかったという事實はキリストに限らない。

けれども、キリストが十字架にかかったという歴史的相対的事実は、その奥に絶対的な霊的な事実としてそこに臨んだんです、啓示的な事実として。キリストの十字架は、これは啓示的な事実ですから。絶対界から相対界に臨んできて、これなくば人間の救いはどうにもならないという十字架なんです。そういう過去の一つの啓示的な事實は、絶対に過去でお終いにはならない。なんとなれば、もし過去でお終いになるなら、それは相対的な過去です。ところが、啓示の事実というものは、一つの相対的な過去の中に起きたけれども、これはいつも現在しているんです。

だから、十字架という一つの事実を現在に受けとっていないならば、その人は十字架を単なる歴史的な過去の事実として受けとっているだけののはなし。それは何も係わりないよ、我々にそんなものは。

「なるほど、今から二千年前にユダヤの宗教的天才が十字架にかかった。ああ、そうですね」

と、それだけの話だよ。

「我に何の係わりあらんや。それが私の罪を贖いましたなんてのは、それはおとぎ話だ」

と。普通、そう考えるわけですよ、相対的歴史的事実として。そうじゃないんです。これは啓示的な事実だから、相対的歴史的な二千年前に起きたけれども、それは相対の中に切り込んで来たところの、絶対な啓示の事実です。これを受けとることが「信仰」なんだ。

これを受けとったら直ちにこの事實は現在に来る。今もなお十字架せられているキリストなんです。我々にとつては、今もなお十字架せられているキリストです。

「このキリストのほか何ものも思わず」

とパウロが言ったのがそのことです。

いいですか。キリストが十字架にかかって、パウロがそれを受けとるまで何年かかったか、それは知らん。それが何年であろうと、今二千年であろうと、同じことなんだ、そんな相対性は。パウロがそれを現在の事実としてはつきり受けとっているということは、これを



啓示の事実として受けとったということです。

それだから、今現在にも我々にとつては、十字架は今もなお私のために十字架せられて
いるキリストなんです。それはパウロが言っている通りです。

十字架せられているキリスト。しかしそのキリストはここにおいて復活して昇天している。
この復活・昇天は、みなこれは啓示の事実ですよ。啓示的な事実はいつも生きている。
そして今、我々になおここに復活のキリストとして、それが今度は御霊のキリストとして
生きている。だから、十字架と復活と聖霊は今、我々に現在の事実として迫っている。こ
れを受けとらなければ、信仰は成り立たない。そうでない信仰は観念信仰であります。

今、現に我々に迫っている。そのようなことにして迫っているこの信は同時に今、私た
ちを罪から贖いとり生命している。本当の聖霊を与えてやまないところの事実として、今、
生成発展しているところの現在の現実であります。だから、これは既に永遠を持っている。
単なる過去は過去ではない。これは未来にわたつていて、終末の世界まで行っている。だ
から、この現在で受けとっているこの現在は何かという、絶対にこれは永遠的現在なん
です。永遠に接しているところの現在なんです、今私たちが生きている現在とは。

普通の人は相対的現在で生きています。けれども、我々は、現在生きているということ
は永遠の中に、永遠に捉えられているところの現在において生きている。なぜ、その現在
を永遠化することができるかというと、この啓示の事実が我々に永遠を与えているんです。
時間というものは、本当はその角度から新しい質をもつて受けとらなければならない。
アウグスチヌスはそこまでちよつと言いかねているようだけれども。

そこで、この愛。我々は今、この信を受けとったら、信はまた同時に、このいわゆる過
去的な事実が現在となつて、愛になる。

望は何かというと、

「やがて来り給う^{きた}」

ということとは、これははつきりと私たちの中に愛の御霊が来ているから、御霊の在るとこ
ろにはこれは天国ですから、

「天国は汝らのうちにあり」

という、この御霊の現在です。天国は既に現在しているから、この終末的現在は、この希
望はまた現在に迫っている。どっちもみんなこの現在に来てしまう。

だから、たまらないです、この現在は。もの凄い。過去も未来も全部このところの動
いている。いつ死んだって、死にはしませんよ、これは永遠の世界だから。神の国は必ず
来ますよ、世界がどうなっても。それだけのものをキリストにおいて受けとらなかつたら、
信仰なんていったって、そんなものは吹き飛ぶような信仰です。いいですね。

そういうような、

「逆説的な神秘に満ちた時間性」



なんていう、向こうの一流の神学者はそこらをやはり掴んでいるよな。

●私はベグルユンダー（創始者）

これはブルンナーが死ぬ最後に書いた著書ですが、ブルンナーが教会の悪口を言ったものだから、教会ではブルンナーのことを非常に悪く言っている。まあ教会というのはダメだね。本当の教会をブルンナーは言っている。『教会の誤解』という小さいけれども素晴らしい本を書いたら、これは教会に嫌われてしまった。そして無教会も分らない、その本当の内容が。もう大神学者の言うことが、私たちには、彼らがちゃんと捉まえるところを捉まえていれば、はつきり見えてくるんですよ。何ということはない。

だから、いつかも言ったでしょ。ブルンナーさんの所へ星野君と二人で訪ねて行って、3時間——始めの1時間、ブルンナーさんは星野君と文学の話をした——あとの2時間は私がしゃべった。ブルンナーさんはむしろ聞き手で、私は何だか知らないけれどもえらく興にのつかってしまつて、使徒的信仰のことを言つたわけだよ。そうしたら、

「異言の体験があるのか？」

と聞かれたから、

「はい、ありますー！」

と答えたら、びつくりしていた。星野君は、

「小池さんは、とにかく世界の神学者を相手にあんなにしゃべるのだから驚いてしまった」

なんてね。そうですよ、本当に。私はもつとねばつて居たかったけれども、お客さんが来たからサヨナラしたわけだ〔註：著作集第6巻『随想集』／第二部「偉大な野人」／一四、「訪問と講演」参照〕。それで、ブルンナーさんは無教会を買いかぶっているから、

「無教会はダメだ」

と言つてやった。もう、御霊のこの使徒的信仰になったら、何ものにもゆずるわけにいかんから。私は本当に、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、パウロと一緒に言えるんだ。だから、ブルンナーは、

「この聖霊はエクレシヤの生命の大事な要素であつて、もし聖霊がなかったら、エクレシヤなんてものは成り立たない」

と、ここでもはつきり言っている。

無教会は、聖霊のことをそれほど言つたかというんだ。内村鑑三・藤井武・塚本虎二を私は尊敬しますよ。尊敬するけれども、ダメなんだそこは。だから、私が先生方のことを、無教会のことを何か言つと、

「あの野郎、小池はけしからん！」



なんて。どこまでもただ守っているんだね、

「先生、先生」

といって。乗り越えて行かない。藤井先生も内村先生も迷惑するよ。

「なぜ、お前たちは先へ行かないか！」

と。あなた方もどしどし私よりか先へ行ってくださいよ。私はベグルンダー (Begründer 創始者) だから。土台がある程度築きましたから。もう先へどしどし行く。体験の世界でどしどし行く。福音は

「これでいい」

というところはない。それで、みな縦の関係で、縦の有機体で行くんだ。私は天界に行ったら、上から応援するから。もしボヤボヤしていたら、幽霊になって出てくるからね (笑)。幽霊でなくて本ものになって出てくる。

「足があるから見てみる」

なんて、まあキリストの真似は出来ませんが (笑)。

●バルトの『教会教義学』

バルトの『教会教義学』(Die Kirchliche Dogmatik)の最後のフラグメント〔断章〕のところに、バルトが最後に書いたのが聖霊のこと、この一卷全部が聖霊のことです。「聖霊におけるところの洗礼」、御霊のバプテスマのところ。最後に気がついていっているんだよ、この偉大な神学者も。最初に気がついてくれればいいのにね。

「キリスト者であるということは確かに新しい被造物

即ち、コリント後書の5章の言葉ですね、「既に新たにせられたるもの」という。

に既に成った。

即ち、十字架・御霊の事態を受けると、そこで確かに完了したということが一つ起きる。

即ち、御霊のバプテスマということを通して。

ところが、この既に成ったものにおいて、古きものは聖霊をもってバプテスマされた者にとっては、古きものではあるのだが、しかし、新たにやってくるところの新しいものである。

即ち、聖霊を受けて、バプテスマを受けて、自分は救われたという事態は、「既に成ったもの」であるけれども、これが救われたということは、それでお終いにならないで、いよいよ前に向かって新しくなっていくところのもので、新しきものとして前進というものを持っているわけだと。

そんなわけで、新しい更に先に進んで行くところの業^{わざ}というものは、この新しき存在を通して進んで行く。」

ということ、いかにも力強く、「創造の御霊よ、来れ」というところに書いてある。



まだここに大変な本があるんだ、本当は。『新約聖書に於ける神の霊』という本がある。これは1926年にジユクセという人が書いた珍しい本で、おそらく日本で持っている者はいないかというもの。これは、私はどこかで1956年に見つけた。これは読んでいても楽しい本なんです、今こんなのをいちいちやっただけでしようがない。

ルッターさんも、『ガラテヤ書註解』の一番先に書いている。

「聖霊の炎、即ちパウロの心にあるところの聖霊の熱火は、これを隠そうとしても隠す

ことができないで、彼は黙さんとして黙することができないで、手紙を書いている」

と。さすがにルッターは見えています、パウロがいかに御霊の火に燃えて手紙を書いているかを。この彼の御霊の火とでもいうような、そういうパウロの手紙というものは、よくこれを本当にとっておいてくれたですよ——どこかへ行ってしまったらね、まだどうとう見つからなかった手紙もあるんだけど——しかしながら、分量の問題ではない。これだけの手紙が残っていればもうたくさんで、これはいくらでも無限の中味を持っていますから。

●在主の靈止

そういうことで、私たちが、今さっきから読んでいるところによって、

「主に在る」

ということは同時に、

「御霊を宿している」

ということだから、「在主の靈止」とは——「在主」なんていう言葉はよく教会でも使うかも知れないけれども——「主に在る」ということを形容的に言っている世界ではないということ。

「私は本当に御霊のキリストの中に生きています。キリストは私の中に生きています」

と。あなた方は、そう言われると、

「はて、私はどうだろうな？」

なんて思うかい？ ちょっと冥想してごらん、「キリストが私の中に、私がキリストの中に」生きていくかどうか。何を疑問にしているんですか、何を。

「生きていくだろうか？」

と思うことはどこから来ますか。そこが大事なところなんです。十字架を本当に受けとつていれば、「生きていくだろうか」なんていうことはいはすなんです。自分がすっ飛んでいないうちは、「生きていくだろうか」と思うですよ、相対的な自分が生きていくうちは。

なるほど、私も相対的な自分は生きています。けれども、相対的な自分が生きていくということが問題でない次元を、



「その現実を、十字架において受けとっているかどうか」

だけが問題なんです、そこだけが。さつきから言っている通り、過去の事実ではない、キリストの事実、現在にある。パウロが、

「私はキリストと共に十字架せられているのだ。相対的な私は相変わらず生きているけれども、もう生きているのではない」

と言っている。

「われ生く、されど我にあらず」

と。パウロはちゃんと皆さんのために言っているんだよ。

「われ生く、されど我にあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

と。御霊がある。十字架を真ん中に置いて、黄色で円を書いてごらん。これが御霊ですから、私は、

「真理の最高の表現は円だ」

と言いましたね。円の中に十字架がある。これはわが現実である。皆さん一人びとりのわが現実はこのである。御霊で包まれてある。

あるいは、御霊が「十字架の」中心にある。こう書いてもいいよ。この方が本当かもしれない。外はでこぼこしているかもしれない(笑)。こんなような人間、しょうがない野郎だ、破れ器だ。ここらが破れたり何かしている。破れ器だけれども、真ん中に十字架があつて、十字架の中心にダイヤモンド以上なものが光っている、御霊が。その方がなお現実かもしれないね。これですよ。こういう存在であります。だから、何も恐くない。何も恐くない、こういう存在であるということが本ものであれば、言うべき時にはつきり言える。行動すべき時にはつきり行動できる。それができなければ、これが本ものでないという証拠です。

これを日常の生活で本当に試してごらん、自分を。

「やつぱり私は、確かにキリストが生きていらつしやるから、あの時、遠慮なくものが言えた。みんなが右と言った時、私ははつきり左と言った」

と。そうなんだよ。組合が何だ。絶対に屈しない。

「私は組合に入らないぞ」

と、はつきり言える。ダメですよ、旗なんか持つては。

次元のちがうところの人間であることをはつきり示す。もうそれでなければ、キリストの証はできない。それで、本当に第三の道なんです。右でも左でもない。これが即ち、在^{ひと}主の靈止。御霊の止どまっている霊止です。

今日は筵題の私の号に「天震」と書いた。天が震っている。晨^{あした}(天晨)ではない。天が鳴り響いているんだ、私を通して。地震でなくて天震です。ペテロの鎖は天震によって取れてしまった「使徒行伝12章」。天震を感じるような——私はこれから「天震」と書くのかな、「天晨」というのはまだ先の話だ——「雨呼ぶ龍か、風呼ぶ虎か」なんていう。雨呼ぶ龍で、



私の名前にもちようと合っている。御霊の雨を呼ぶ辰でございます。

あなた方、とにかく、それは楽しいよ正直、やってごらん。楽しいから。本当に日常生活でそうやって勝つていくと、楽しいです。まあ、失敗したら、転んだら、滑ったら、

「神さま、申し訳ございません！」

と平伏す。必ず立ち上がらせてくださる。心配するな。何か生き詰まっても、悲しいことがあっても、大丈夫。目の上のたんこぶみたいなやつがいても、

「何だ、あんなものは」

といって、平ちゃらなひとに男でも女でもなつてくださいます。そうなんだよ、キリストをうちに持つてごらん。何を、どう思われても、

「自分を迫害する人のために祈れ」

なんて、パウロは書いています。パウロはそれを力んで書いてない。もう正直、できるんだ、楽に全部。御霊がくれば、みんなこれ楽なんです。キリストの福音書の烈しい言葉も、烈しいほど力になってくる。何となれば、

「キリストわがうちに居給う」

から。私は、とにかくこうやって、皆さんと朝から晩まで——明日の朝までやったっていいんだけど——徹夜なんていったって大したことではない、このまま続けていけば。

とにかくやつぱり、集会は楽しいですよ。そこらにバーで酒のんで楽しいやつもいるだろうけれども、こちらはそんなものはひとつも楽しくはない。

「あの小池はそういう楽しみはちつとも知らない気の毒なやつだ」

なんてね(笑)。ところが、こっちはそれ以上の楽しみをこういう集会で知っている。だから、そう簡単に集会は辞めませんよ(笑)。とにかく、私の言うことは絶対に一面からは分かります。非常な矛盾構造をなしていますから。その矛盾構造の醍醐味がわかれば、それはそれでいいわけだ。では、このへんにしておきましょう。

● 祈り

それぞれ皆さんは具体的なものを心の中に置いて祈られて結構です。何も具体的なことを口に表さなくてもいいですけども。あまり、でっかい声を出さないでね、静かな深い声で。神さまは、声の大小によって距離が少し届かないとか、そういうことはない。沈黙の雄叫びというのがある。それでもちゃんと届いている。

……奥田さん、祈ってください。

「贖い主、主イエスさま、あなたが十字架についてくださったあの事実が、永遠的絶対的、歴史を貫いての現在的事実となつて、私たちに迫ってきてくださり、「本当に私とお前は一緒に十字架されたよ」と、主さま、切り込んで来てくださった。のつぴきならぬこの絶対の突破口を既に開いてくださった。……本当に我らを



靈止として活かしてください、この現実をありがとうございます。これが貫いている以上、本当に主さま、……「証することが」できます。主さま、感謝いたします。限りなく、本当に分けて参ります。どうか、貫いてください。主さま、お願いいたします。ありがとうございます。本当に使命を与えてくださったつて、先生が語られたその呻きに期待して行きとうございます。御名によって感謝して祈ります。アーメン。」

主イエス・キリスト、父なるおん神さま、御霊なる主さま。1974年6月2日、このペンテコステ、午前よりただ今に至るまで、聖手のうちに掌握してください、御言御霊をもって懇ろに導いてくださり、私たち一人びとりを、自分自身を投げ出して告白し、またあなたはこれを打って一丸、お捉えくださり、感謝いたします。ただ聖名を讃え奉ります。

信仰にはいろいろな段階がありますから、新しい方も別に急ぐことはありません。どうぞ、ただひたすらに、水を割ることなく、疑うことなく、大胆率直にこの聖書の中に自分を偽りなく投げ入れていくこと、これだけが道です。

どうぞ、そのように古き人も新しき人も、いよいよこの単純率直な百卒長のような「然り、然り！」をもって、己に対しては「否！」と乗り越えて進んで行く、その秘訣を与え給うものは十字架であります。

主さま、十字架によつて私たちは、今、奥田君も切々と祈りましたように、既にすつ飛んでおります。こんな相対的な自分なんかどうでもいいです。主さま、あなたが私たちの中に入つて、常に新たに創造し展開してやまず、無限無量なるものを与えてやまず、またその力を人に及ぼさんとしてやまず、主さま、どうぞ、そのようなあなたの御愛の御力の事態が私たちを突き破つて、自由自在にお現れくださらんことを。

現実にはいろいろな矛盾があります。解けないことがあります。しかし、そんなことは頭で解こうとしたり、頭で矛盾を解決しようとしません。もつと奥の現実においてただあなたに本当に赦されつつ、またあなたに突き破られつつ、あなたに創造されつつ、自在にご展開なされんことを切に願ひ奉ります。

かくして、私たちは何か知りませんが、本当に何ものも否定することのできない驚くべき事態に次第次第に化せられて行くことを感謝いたします。どうぞ、この破れ器をお使いくださつて、証人としてこの一人びとをお使いくださるように。

京都の召団、また東京の召団、その意味においてのみ、私たちの存在の意味がありますが、どうぞ、主さま、そのようにしていよいよお鍛えくださらんことを切に願ひ奉ります。今、日本も世界もいろいろな問題が錯綜し、行き詰まっていますが、しかし、天は行き詰まっています。四方八方が行き詰まっていますが、これを突き破っていくものはこの天来の力、この力です。「神の国は言にあらず、力にあり」と、この御霊の力をもつて、いよいよ一人びとりを、神さま、一切の運命環境に対して……「録音切れ」……

